所報　平成3年9月15日創刊　平成30年2月15日発行・毎月1回15日発行・No. 303
一般社団法人 協同総合研究所 ISSN 1344-7300

協同の發見

きょうどうのはっけん

第303号
2018.2

特集　若者自立支援 から 若者協同実践 へ

◎ 座談会　若者支援をめぐって『協同』の可能性を問う　若者協同実践 × 協同労働
大高 研道 × 南出 吉祥 × 古村 伸宏
◎ 兵頭 宏美　一般社団法人 若者協同実践全国フォーラムについて
◎ 篠原 健太郎　地域若者サポートステーションの現状と課題 ── 世田谷サポステの実践から見えてきたこと ──
◎ 椰木 賢二　若者たちと共に生きる協同労働の職場づくり
◎ 日髙 璃李愛　鹿児島谷山事業所で働いて思うこと
◎ 入山 頌　遊ぼう、いまを生き抜くために ── 国立市公民館コーヒーハウスとわたしたちの暮らし

■海外レポート
◎ 島村 博　起動措置と連合制度(2－1)
◎ 岡安 智生　社会的協同組合国際スクール2017　参加報告

■巻頭言
佐藤 洋作　若者たちからの「働き方改革」へ

一般社団法人 協同総合研究所
JAPAN INSTITUTE OF CO-OPERATIVE RESEARCH

題字／藤原 桂州

協同の發見

第303号 2018.2

特集　若者自立支援 から 若者協同実践 へ

目 次

巻頭言

若者たちからの「働き方改革」へ …… 2
佐藤 洋作（NPO文化学習協同ネットワーク代表理事／協同総研理事）

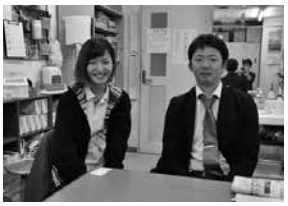
特集　若者自立支援 から 若者協同実践 へ

- 特集にあたって …… 4
  利根川 徳（協同総研専務理事）
- 座談会 …… 5
  若者支援をめぐって『協同』の可能性を問う　若者協同実践×協同労働
  大高 研道（明治大学教授／日本協同組合学会副会長／協同総研常任理事）×
  南出 吉祥（岐阜大学准教授／JYCフォーラム事務局長／協同総研理事）×
  古村 伸宏（日本労協連理事長／JYCフォーラム理事／協同総研常任理事）
  司会：利根川 徳（協同総研専務理事）
- 一般社団法人 若者協同実践全国フォーラムについて …… 27
  兵頭 宏美（JYCフォーラム事務局）
- 地域若者サポートステーションの現状と課題 …… 31
  ── 世田谷サポステの実践から見えてきたこと ──
  篠原 健太郎（センター事業団 東京中央事業本部 事務局次長）
- 若者たちと共に生きる協同労働の職場づくり …… 39
  椰木 賢二（センター事業団 鹿児島谷山事業所 所長）
- 鹿児島谷山事業所で働いて思うこと …… 45
  日髙 璃李愛（センター事業団 鹿児島谷山事業所）
- 遊ぼう、いまを生き抜くために ── 国立市公民館コーヒーハウスとわたしたちの暮らし …… 47
  入山 頌（コーヒーハウス・スタッフ）

海外レポート

- 起動措置と連合制度（2－1） …… 61
  島村 博（協同総合研究所 主任研究員）
- 社会的協同組合国際スクール2017　参加報告 …… 73
  岡安 智生（ワーカーズコープ センター事業団 事業推進本部）

労協連だより　髙成田 健 …… 89
研究所だより　相良 孝雄 …… 90



巻頭言

若者たちからの「働き方改革」へ

佐藤 洋作（NPO文化学習協同ネットワーク代表理事/協同総研理事）

●若者支援はいまだ若者たちの願いに応えられていない

ようやくエネルギーを回復して働き始めたのに、雇止めにあったり、精神のバランスを崩して若者支援の窓口に舞い戻ってくる若者が後を絶たない。

本格的若者政策が開始されて10数年が経過したが、支援は若者のニーズに応えてきたとは言えない。サポステを経て就職したもののその70％以上が非正規就労であり、働き始めたとしてもすぐに失業状態に舞い戻ってしまう可能性が高い。

若者の「社会的ひきこもり」が増大しているという状況を背景に、ひきこもりは若者たちが働きたいのに働けない、あるいは働けば働くほど疲弊し心が折れていく労働環境への反映だと書いたことがある。ギリギリの尊厳を防衛するために硬い殻に閉じこもりながら人間性を奪われていく現実への異議申し立てをしている状態像なのだと。裏返せば、若者たちは新しい世紀への転換期にいち早く、利潤追求のための働き方から自分が生かされる働き方へと労働観をシフトし始めている。ひきこもりはそうした若者の悲痛な声なき叫びであり、『若者たちの中に、新しい働き方への模索が始まっている』と、本誌（「協同の發見」第93号、2000.1）の巻頭言に寄稿した。それから18年ほどが経ったが、若者支援はいまだ若者たちの願いに応えられていない。

●若者統合型社会的企業への挑戦

全国の支援現場ではたんなる個人的なケアにとどまることなく居場所づくりや学び直し、さらには社会参加や仕事体験プログラムなどが進められてきた。そうした取り組みの中であらためて感じたのは若者たちの「人間らしく働きたい」という願いであり、企業の利潤追求のためにがむしゃらに働くことを強いられることへの不安であり、怖れである。生きるためには働くしかないという親の警告的なアドバイスに、それなら死ぬしかないだろうかと思ってしまうと語る若者もいる。そんな若者たちの願いが保障される仕事場をつくりだしたいと各地でさまざまに取り組まれてきている。私たちのパン屋も、若者が自分たちで生産した小麦などを原材料にして安心安全なパンをつくり地域の人々に喜ばれ、地域の保

育園の給食などに届ける、いわば「若者統合型社会的企業」づくりへの試みであった。最近ではコンピューターを用いて出版物を作成するDTPの仕事おこしにも挑戦している。

若者支援現場の仕事おこしだけでは限界があるのはいうまでもなく、企業と若者支援現場との連携が必要である。若者と中小企業の現場をつなげ、人手不足を解消するだけではなく、若者の願いを受け入れ若者を育て企業も育っていく「働き方改革」ムーブメントが生まれようとしている。私たちのDTPの仕事おこしも印刷業界からの支援や連携ですすめられている。

●「ひきこもり支援」から「若者協同実践」へ

どうしても支援と言えば福祉的医療的な個人的ケアに向けられがちであるが、若者支援においてはどうしても若者を受け入れる共生的なコミュニティ(地域や社会)のあり方がポイントになる。若者支援が就労支援を出口とする限り、支援団体や専門機関やさまざまなNPOや市民だけでなく地域の商店や企業をも含む地域経済ネットワークとして編み直される必要がある。生産と消費の連携や一体化、あるいは若者の仕事場への優先的発注など互酬的な経済システムが、部分的だとしても市場経済の中に組み込まれて行かなければならない。

ひきこもりの若者が抱える生きづらさはより多くの孤立し貧困化する若者と地続きの課題である。そうした理解の深まりと並んで、若者支援は個人的なケアと地域コミュニティの再生を一体のものとして進めることが必要であるという理解が共有されるに至り、若者支援のテーマはメンタルケアから仕事づくりや共生の場づくりにつながる包括的なものに広がってきた。同時に協同実践という視点の明確化である。若者支援は支援団体や専門家の若者への一方的な支援としてではなく、支援－被支援を超えた双方向的な関係であり、さらには若者と地域住民、あるいは支援者と支援者の学び合いに支えられた「協同実践」であることのとらえ直しである。ひきこもり支援に関わる実践者が集まってスタートした「全国ひきこもり支援実践者交流会」は「全国若者・ひきこもり協同実践交流会」へと発展し、14回目となる今年度は名古屋開催となる。

協同総合研究所は、労働者、市民が自らの力で自律的に仕事と生活の豊かさを求める活動を支援するシンクタンクです。わが国にも「大量失業の時代」が到来する中で、労働者、市民が自主的に仕事おこしをする労働者協同組合（ワーカーズコープ）への注目が増しています。研究所は、わが国唯一の「労働者協同組合」に関する専門研究機関です。

研究活動をネットワークし、蓄積された情報を資源として支援する「協同の發見」を会員のみなさまに毎月お届けいたします。